

徳之島近世人に認められた複雑性歯牙腫

Complex Odontoma in a Recent Tokunoshima Islander

竹 中 正 巳

Masami TAKENAKA

はじめに

歯牙腫は、歯の硬組織、すなわち象牙質およびエナメル質を主体とする腫瘍状病変であり、正常歯胚あるいは過剰歯胚がなんらかの原因によって異常増殖を起こしたことに由来する（石川，1982）。現在では、WHOの分類にしたがって、複雑性歯牙腫 complex odontoma と集合性歯牙腫 compound odontoma の2つに大きく分けられている（森，1988）。

これまで日本列島で出土した古人骨において報告された歯牙腫は、集合性歯牙腫2例のみで、いずれも古墳時代後期に属する人骨に認められた。宮崎県西都市酒元の上横穴墓群6-2号墓女性熟年人骨（小片ほか，1996）と鹿児島県高山町北後田古墳群地下式横穴墓1号墓A人骨（男性熟年人骨）（竹中，2007）である。

複雑性歯牙腫は報告例がなかったが、新たに、徳之島の近世人骨に確認された。本稿では、この複雑性歯牙腫について、古病理学的観察および検討を行った結果を報告する。

資料および観察方法

研究を行った古人骨は、鹿児島県大島郡伊仙町犬田布のいわゆる風葬墓から出土した近世に属するNo.58人骨である（図1）。歯の萌出状況は、次に示す歯式のとおりである。

E 4 2 1 | 1 2 DE 6

年齢は8～10歳の小児で、性別は不明である。本人骨は、現在、鹿児島大学大学院医歯学総合研究科神経病学講座歯科応用解剖学分野に保管されている。複雑性歯牙腫は、未萌出の上顎右第一大臼歯部に認められる。

観察は、肉眼観察のみでおこなった。

古病理学的観察結果と考察

本人骨の年齢からすると、当然萌出していなければならぬ上顎右第一大臼歯が萌出していない。上顎歯槽骨中に埋伏中の本歯の歯冠の近心舌側隅角から近心面かけて、歯とは別の硬組織が3個確

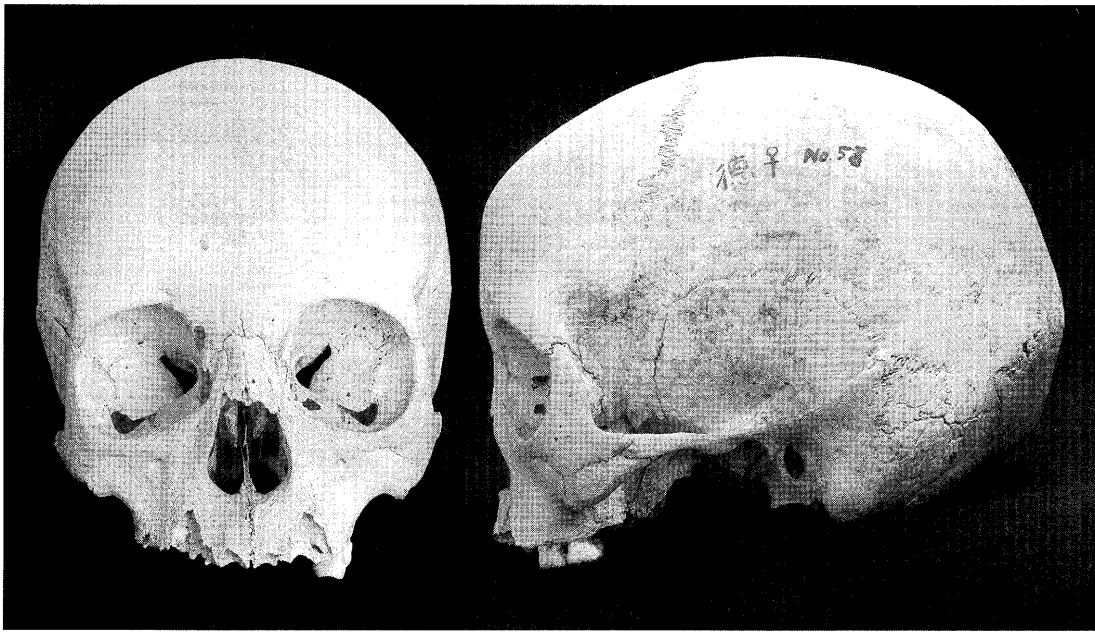


図1. 鹿児島県大島郡伊仙町犬田布出土近世人骨（性別不明・小児8～10歳）頭蓋正面観

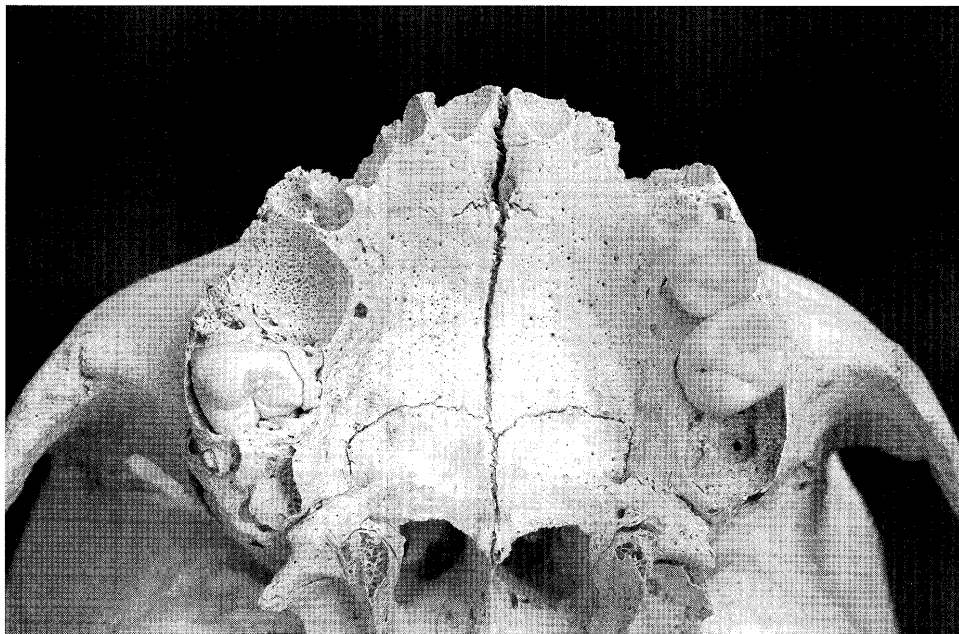


図2. 鹿児島県大島郡伊仙町犬田布出土近世人骨（性別不明・小児8～10歳）の上顎歯列（埋伏上顎右第一大臼歯部に複雑性歯牙腫）

認できる（図2・3・4）。近心舌側隅角部の硬組織は3つの内、最も大きく、最大長は約8mmを示す。残りの2つの硬組織は、両方とも約2mmの大きさである。これら2個の硬組織は上顎右第一大臼歯の歯根部に付着している。最も大きい硬組織は、現在は独立し、歯冠とは接しているだけであるが、元々生前は自身に近い側の硬組織に繋がっていた。これら3個の硬組織には、エナメル質は形成されておらず、象牙質やセメント質から成るように見える（図2・3・4）。4個の硬組織は、歯を形成する組織が過剰に増殖して生じた歯原性腫瘍の中の、歯の硬組織を主体とする病変で

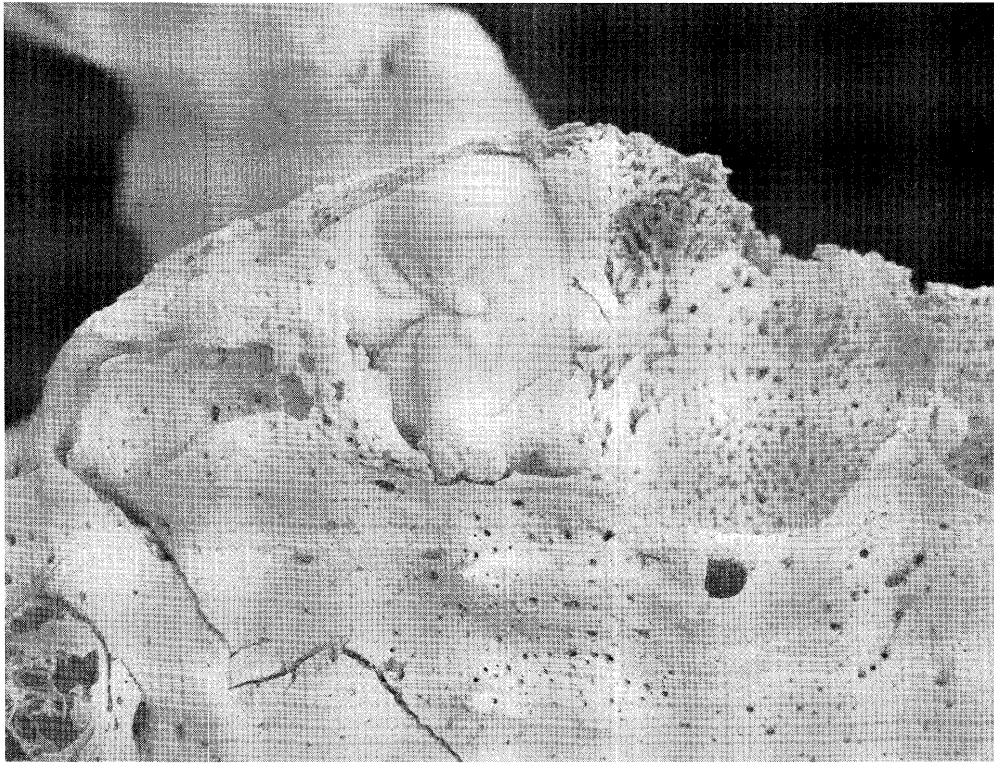


図3. 鹿児島県大島郡伊仙町犬田布出土近世人骨（性別不明・小児8～10歳）の埋伏上顎右第一大臼歯部に複雑性歯牙腫（拡大写真）

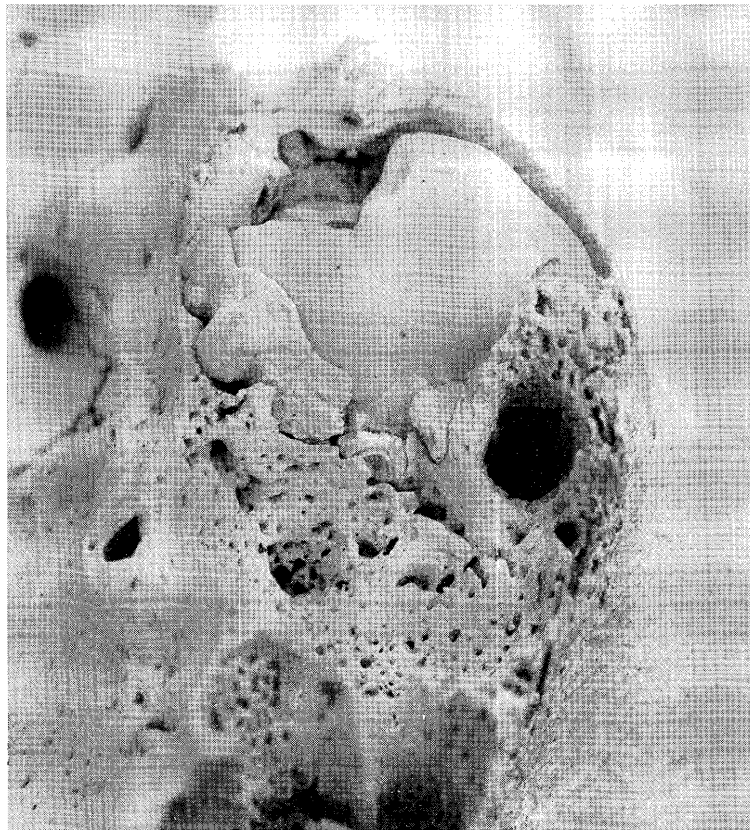


図4. 鹿児島県大島郡伊仙町犬田布出土近世人骨（性別不明・小児8～10歳）の埋伏上顎右第一大臼歯部に複雑性歯牙腫（近心側からの拡大写真）

ある歯牙腫によって生じたものと考えられる。

本例の場合、歯牙腫のほかにエナメル上皮線維象牙質腫 (Ameloblastic fibrodentinoma) (象牙質腫 Dentinoma) との鑑別が必要になる。しかし、硬組織の周囲に軟組織が混在できる場所的余裕があまりないこと、本人骨の年齢が小児であり、硬組織が未萌出歯冠に直接し、歯根部に接着していることから考えて、歯牙腫として診断してよいと思われる。

歯牙腫は、成熟歯牙硬組織の腫瘍という意味から、複雑性歯牙腫 complex odontoma と集合性歯牙腫 compound odontoma の2つに大別されているが、両者の移行型が存在することも知られている (森, 1988)。複雑性歯牙腫は、石川 (1982) によると以下のような特徴が挙げられている。組織学的に不規則な配列をなす塊状の増殖物で、細管構造の明らかな象牙質および小柱構造の明瞭なエナメル質が認められ、またセメント質あるいは無構造の石灰化物のみの認められる場合もある。好発年齢は10歳代で、性差は明らかでない。好発部位は下顎臼歯部で、上顎前歯がこれに次ぐ。臨床的には、小さなものは無症状であるが、乳歯の残存や永久歯の埋伏あるいは欠如を伴うことが少なくない。大きなものは鶏卵大以上に達し、顎骨の膨隆や歯の位置異常を起こす。X写真では、周囲の骨質と明らかに区別できる塊状の不透過像として認められる。

集合性歯牙腫も、石川 (1982) によって以下のような特徴が挙げられている。組織学的には多数の歯牙様構造物からなり、個々の構造物は典型的な本型では軟組織で隔てられる。これらの構造物の大きさおよび形はいろいろで、ほとんど正常な外形を示す歯を縮小したように見えるものから、かなり不規則なものまで種々である。好発年齢は10歳代で、複雑型よりも若年者にみられることが多い。性差は明らかでない。好発部位は前歯部、とくに上顎である。臨床症状も複雑型と同様であるが、時には矮小な歯が萌出してくることもある。X線写真では、小さな不透過物が集合して認められる。摘出物は肉眼的にも種々の形の小さな歯牙様物を含み、その数は数個から、時に数百個におよぶこともある。

徳之島近世人の埋伏している上顎右第一大臼歯に認められた3個の硬組織は、組織の形態分化が進んでおらず、歯牙腫の中でも、複雑性歯牙腫と診断される。好発部位とは異なるが、永久歯の埋伏を伴っている。本人骨の複雑性歯牙腫はそれほど大きくなく、まだ成熟途上の複雑性歯牙腫であろう。患部の膨隆は若干認められるだけであり、患部の膨隆が小さいことから、生存時、患部についての痛みや違和感などは、まだ感じなかったと思われる。ただ、左側の上顎第一大臼歯が既に萌出しているのに対し、右側が萌出していないことは気付いていたかもしれないが、この萌出遅延が複雑性歯牙腫によるものだと知らなかったはずである。

これまで、日本列島から出土した古人骨において報告された歯牙腫は集合性歯牙腫のみであった。小片ほか (1996) によって報告された古墳時代後期の宮崎県西都市酒元の上横穴墓群6-2号墓人骨 (女性・熟年) と竹中 (2007) によって報告された同じく古墳時代後期に属する鹿児島県高山町北後田古墳群地下式横穴墓1号墓A人骨 (男性・熟年) である。

今回の徳之島近世人に確認された複雑性歯牙腫の1例は、歯牙腫の古病理学的研究を進展させるための貴重な1例となる。今後、歯牙腫の報告例がさらに増加し、発現頻度や好発部位の時代差、地域差、社会階層差や性差等の研究が進展することを期待したい。

引用文献

- 石川梧郎 (1982) 歯原性腫瘍. 石川梧郎監修 口腔病理学Ⅱ. pp.461-530. 永末書店. 京都.
- 森昌彦 (1988) 歯原性腫瘍. 宮崎正編 口腔外科学. pp.117-144. 医歯薬出版. 東京.
- 小片丘彦・竹中正巳・峰和治 (1996) 16号支線道路横穴墓群出土の人骨について. 「西都原地区遺跡」西都市埋蔵文化財発掘調査報告書 22:128-136.
- 竹中正巳 (2007) 古墳時代人骨に認められた集合性歯牙腫. 鹿児島女子短期大学紀要 42:1-5.

(2007年12月5日 受理)